

## 稟申・隣人・リンス？

Andreas Rusterholz

広辞苑で調べてみると、“稟申”（りんしん）と“リンス”という単語が、“隣人”という言葉の、思いがけない隣人になっている。もうちょっと格好のよい言葉が“隣人”と隣同士にならないかと思って、違う辞典で調べた。そして、また別の辞典を手にした……

私たちもよく思いがけない人と隣り合わせになる。自分のことで悩んでいたり、隣り合わせになった人が気に入らなかつたりしたら、関わらないようにすることもあるだろう。しかし、いつも関わらないようにすることが出来るとは限らない。“隣人”に相応しい（と思われる）隣同士の言葉を捜せば、遅かれ早かれ都合のよい言葉が見つかるかもしれない。しかし、人間の場合はそう簡単にはいかない。自分の都合の良い人としか話をしない人もいるが、いつか親しくしている人々がいなくなれば、自分は寂しくなる。そこで、態度を変えて新たな触れ合いのきっかけとなる場をつくるのは非常に難しい。

話は変わるが、「虹色の魚」という、スイスの絵本作家が書いた本（講談社）がある。虹色の魚は世界で一番きれいな魚で、きらきら光る鱗が自慢である。自分のことしか考えないせいで、孤独になったしまった「虹色の魚」は苦しかった。暫くしてから反省して、きらきら光る鱗を皆に分け与えて、幸せになったという内容である。問題点が明らかになれば、人間にはその問題を解決する力があるということが、この話の前提らしい。しかし、私たちには必ずしもそういう力があるとは限らないし、問題自体に気付くことなく、自分の態度を変える必要性を覚えることも余りないのが現実であろう。

代表的な例は徴税人ザアカイ（ルカ19:1～10）という人である。“アウトサイダー”でありながら、財産が彼の慰めになり、自分の置かれている状況に耐えた。しかし、ある偶然な出会いが彼を反省させた。そして、彼は隣人の大切さに目が覚めると、自分の財産を分け与えるようになった。これは、自分の努力によってではなく、他の人が惨めな自分を隣人として認めて、彼に頼ったことによって助かったのである。自分は弱い者であっても、思いがけない出会いに直面して、どう反応するかで、その後の運命が劇的に変わることもあるのだ。

（文学部専任講師・宣教師）